

# 『伊達鑑実録』と『伊達嚴秘録』と

高橋圭一

一、初めに、本稿の主題

二、『伊達鑑実録』の脚色

三、『伊達鑑実録』『伊達嚴秘録』共通の脚色

四、『伊達嚴秘録』の脚色

五、終りに、『伊達嚴秘録』以後

実録「伊達騒動物」の中では「仙台萩」が最も重要な作であるが、本稿ではその増補作である『伊達鑑実録』と『伊達嚴秘録』について考察を加える。両作の内「伊達鑑実録」が早く成立し、「伊達嚴秘録」は遅れて「仙台萩」「伊達鑑実録」共に参照して成ったらしい。「仙台萩」を増補するに当たっては、元禄から享保頃に編まれた「諸家深秘録」「諸家大秘録」が使われていることが明らかになった。ただし、その利用は補助的なものであって、基本は「仙台萩」である。二作共に「仙台萩」の枠組みを外すことなく、中に残されていた小さな取っ掛かりをもとに話を膨らませ、新たな人物を生み出し以前からの登場人物の性格はより鮮明にしている。二作の増補は一言で言うならば、「娯楽的付加」であって、「仙台萩」に見られた談理性は薄められた。『伊達嚴秘録』以降も「伊達騒動物」は変化を遂げるが、その一斑も紹介する。

## 一、初めに、本稿の主題

前稿「伊達の対決——実録『仙台萩』攷——」（『国語国文』平成9年10月。以下、前稿）では、専ら実録「伊達騷動物」の中心に位置する「仙台萩」について、先行作「仙台中公事物語」との関係を主として考察した。そして後続の『伊達鑑実録』（書名には「鑑」「鏡」共に用いるが、本稿では「鑑」に統一する）と『伊達厳秘録』は「仙台萩」を増補したものであるが、基本的な違いはない（前稿第二章一節）とした。本稿ではそのことを具体的に検証し、増補に当たって利用した資料を紹介し、合わせて幾分かの作品の性格の変化についても述べる。なお、前稿において『仙台萩』の梗概は詳しく紹介したので参照していただきたい。本稿では、『仙台萩』を増補した部分を除き、『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』両作の梗概は記さない。

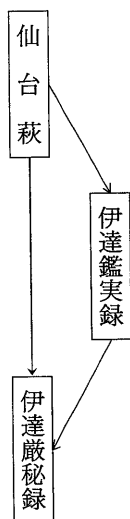
## 二、『伊達鑑実録』の脚色

中村幸彦氏の「実録と演劇——伊達騷動物を主として——」（『中村幸彦著述集』第10巻所収）に拠れば、明和七年（一七七〇）の序を持つ『全書仙台萩』二十巻と「ほぼ同じ頃成立して、若干相違する箇条を含むものに『伊達鑑実録』（『競実録』とも書く）十八巻がある」という。ま

た『日本古典文学大辞典』『伊達騷動物』の項では、中村氏は『全書仙台萩』と『伊達鑑実録』とは大同小異であるとされている。『全書仙台萩』は『仙台萩』にごく小部分を付加した作であり（前稿第二章一節参照）、『仙台萩』の増補作である『伊達鑑実録』との関係は中村氏の指摘の如くなる。但し成立年代については、現在のところ決め兼ねているが、一応中村氏の言われるように明和・安永年間頃（一七六四・八一）と推定しておく（注2参照）。

諸本中には『伊達鏡』と題するものもあるが（所見は山本卓氏蔵本）、宮城県図書館蔵の『伊達鑑』（『伊達鏡』を含め三部）は地誌と伊達政宗の一代記で、伊達騷動とは無縁である。その他、別名として現在までに確認できたのは、『寛濶伊達鑑』『伊達鏡実録大全（実録で「大全」と書名に付くことは極めて多いが、大方は「大全」が付く以前のものと殆ど変らない）』『伊達鏡正説実録』『伊達鏡東伽羅実録』『伊達騷動記』『伊達秘録』『増補銘台萩』『伊達評定』『増補仙台萩』、等である。『仙台萩』の増補作であるのは後述の『伊達厳秘録』も同様であるが、比較すると『伊達鑑実録』の方が『仙台萩』から離れる度合いが少なく、文辞もそのまま用いることが多いのは、成立の早さの故と思われる。後続の『伊達厳秘録』は『伊達鑑実録』と全く別個に『仙台萩』を増補したものではなく、かなり

『伊達鑑実録』を吸収しており共通する部分が多い。簡単に示せば、



ということになる。

『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』に共通する増補部分は三章に廻し、先ずは『伊達鑑実録』のみの付加箇所を見ることにする。御家騒動物の後年の作の常として、冒頭には騒動以前の家の歴史が叙される。架蔵の『伊達鏡東伽羅実録』（外題。内題は「伊達鏡実録」。以下『伊達鑑実録』の引用に際してはこの本を用いる）の目録を掲げると「伊達家由来之事」「田村家系図之事」「伊達左京大夫政宗御一生之事」まで。次が「伊達兵部少輔宗勝力事」で本題に入る。この冒頭部分を作るに当たって、実録作者が歴史家のように、伊達家の歴史について出来るだけ多く史料を集めて物したとは考え難い。手許の重宝な著作を最大限に利用したと考えるのが、実態に即した見方であろう。その重宝な著作に『諸家深秘録』『諸家大秘録』を挙げる事ができる。

中村幸彦氏の「近世圏外文学談（一）概説」「著述集」第13巻所収）に拠れば、戦国期から元和偃武にいたる武將

勇士の逸話集である武辺咄類は版本写本共に多く作られよく読まれたが、「天下平穩になるにつれて、戦場や武勇の逸話よりも、平和時におけるすぐれた人々の逸話に興味がおもむくのも、時のなりゆきである」という。『諸家深秘録』は読者の興味が移りつつある言わば過渡期の武家説話集である。中には戦場や武勇の逸話と太平の世の話題とが相半ばして収められている。収録話は国会図書館蔵本で全百六十一条。最も新しい年号は元禄二年（一六八九）で、五代綱吉を当公方と記すことなどからして綱吉治世下に成ったと思われる。姉妹篇もしくは続篇と言うべきものが『諸家大秘録』で、絵島一件（正徳四年（一七一四））が載り（架蔵本はこの項を欠く）、奥州岩城藩主内藤義稠の死（享保元年（一七一六））を記すことなどから推して享保年間の成立。国会本で全五十三条からなる。馬場文耕の『当時珍説要秘録』（宝暦六年（一七五六）成）に「深秘録や大秘録に詳しいので省略する」という内容の言がある。文耕の目に触れていたことは間違いないが、或いは彼が著述する際に意識した先行作ではなかったかと、その内容の類似から想像する。さらに本稿の主題からは逸れるが、『諸家深秘録』『諸家大秘録』は水戸黄門や大久保彦左衛門等の実録化にも関係しており、実録研究上看過できない作である。

『伊達鑑実録』に戻って、「伊達家由来之事」は「諸家深秘録」巻之四「前伊達大膳太夫政宗詠歌<sup>附</sup>將軍義持公政宗へ御弔御詠歌之事」（『諸家深秘録』の引用は国会図書館蔵本に拠る）を主たる典拠とし、『全書仙台萩』の森昌房の序に校合に用いた史料として書名の挙がる『本朝武林伝』（延宝七年へ一六七九）序。諸家の伝記）を参照したようである。梵天丸（政宗の幼名）の誕生については様々な説があるものの取るに足らないと言うが、これは政宗が行者満海の生れ変わりとする説を指すのであろう。この説、『諸家深秘録』（『諸家大秘録』にもあり）には記されているが『本朝武林伝』には見えないものである。「田村家系図之事」は、伊達綱宗隠居後、伊達兵部と共に亀千代の後見となった田村隠岐守の家系を略述する。『諸家深秘録』巻之十二「田村右京太夫殿母儀之事<sup>附</sup>田村氏出生之事」と巻之十四「田村氏先祖浄野之事<sup>附</sup>奥州三春鶴ノ庖丁不成事」を合わせれば書ける内容である。この条と連関するのであろうか、後に忠臣浅岡・松前鉄之助が伊達兵部・原田甲斐の企んだ亀千代呪詛疑惑のために危機に陥った時には、隠岐守の弁護によつて全く罪を遁れ、却つて山伏の化けの皮が剥がされている。『仙台萩』よりも隠岐守の活躍が際立っているようである。「伊達左京大夫政宗御一生之事」中の、元和年間（一六一五〜二四）に鷹狩りに出かけて只

一人床几に座していた家光を参勤途次の政宗が見掛け、後日手痛く諫言するというのは、『諸家大秘録』巻之三「伊達政宗御鷹野諫言之事<sup>并</sup>御鷹野先色（々々）之事（架蔵本。以下同本に拠る）」の一部を殆どそのまま写し取つたものである。この条の最後に置かれる話（東京大学総合図書館蔵『増補仙台萩』では「伊達家御朱印の話<sup>并</sup>直孝器量の話」という独立した一条となる）——政宗がかつて家康から貰つた百万石の墨付の履行を、二代忠宗が將軍家綱に願ひ出る、そこで井伊掃部頭が伊達家へ赴き、家康の直筆拝見と言つて墨付を手に取り引き裂いてしまふ——、これは『諸家深秘録』『諸家大秘録』には見えないが、やはり近世には広く流布し読まれていた『武野燭談』（宝永六年へ一七〇九）序）に拠る。『武野燭談』巻之一六「直孝忠勝 信綱 重宗 慎勤の事」（江戸史料叢書『武野燭談』に拠る。人物往来社 昭和42年）では井伊掃部頭の忠義を賞賛するのみであるが、『伊達鑑実録』では掃部頭に感心し道理に服した忠宗をも称揚している。『窓のすさみ』（松崎観瀾 享保九年序）や『故諺記』（『翁草』巻之一）に類話が収まるが、こちらは忠宗ではなく政宗が願ひ出ているので、『伊達鑑実録』が拠つたのは『武野燭談』であるとしてよい。

伊達兵部少輔宗勝と原田甲斐宗輔（宗輔が正。『仙台

萩』では直則)の由来、生立、合体のことまでは『仙台萩』と一致。綱宗に遊蕩を勧める件の前に「新吉原之事」が挿入される。これも『諸家深秘録』巻之十八「前松平陸奥守閉門隱居<sup>附</sup>江戸風呂屋遊女吉原ノ傾城被移三谷事」から取ってここに置いたものであろう。

淫酒に耽る綱宗に諫言する人物として、新たに白川主殿が加わる。前掲中村論文にこの白川主殿と後述の多田武助に関する条が、「仙台萩」系になって『伊達鑑実録』のみに見えるとの指摘がある。主殿は綱宗の近士で伊達安芸の妹婿。仙台在国の折、安芸(甲斐同様安芸の名も正しく宗重とされる。『仙台萩』では宗雪。甲斐、安芸の名も『諸家深秘録』巻之二十三「伊達兵部太夫依惠逆被処遠流<sup>并</sup>陸奥守殿家老原田甲斐狼藉始終之事」に拠って訂正したのであろう)から強く要請され出府して諫言に及ぶ。結果は大酒のために正気を失っていた綱宗に手打にされる。

『仙台萩』にこの件は無いものの、亀千代の乳人として浅岡が初めて登場した時に、彼女が夫白川主殿を亡くした寡婦であり子供はいないとの注記がなされていた。この小さな取っ掛かりから、白川主殿の行爲は作り出されたのである。話としては既に中村四郎左衛門、亘理三平が諫死しているの、ややくどい印象を与えるのは否めない。

兵部・甲斐の亀千代毒殺計画に一旦荷担したものの母親

の異見もあって改心し(かなり長い母子の愁歎場が挟まれる)、自ら進んで亀千代の毒入りの膳部を食して死ぬのが多田武助。武助の名は『仙台萩』にはなく、この件は『伊達鑑実録』の創作である。

ごく細かい改変は他にも有るが、『伊達鑑実録』独自の付加部分はおおよそ以上である。

『伊達鑑実録』が『仙台萩』から削った箇所も僅かながらある。谷地騒動の最後に安芸が目附二人に木村長門守の逸話を語ることとはなくなり、その前の伊達式部に対する家臣の諫言も短い。『仙台萩』の中で伊達安芸・片倉小十郎・片山隼人がそれぞれ口にする軍書風の弁舌は、省かれるか短縮されている。全体からすれば微々たる分量であるが、前稿(二章二節)で『仙台萩』の特色とした軍書風の脚色、武士としての生き方を示す姿勢、どちらも『伊達鑑実録』では後退していると言える。

続けて『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』両作に共通する新たな脚色を、章を改めて見る。

### 三、『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』共通の脚色

亀千代毒殺計画失敗の後(『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』では伊達安芸の許に曲者が忍び込み捕えられる件の後。両作では話の順序の前後することは多いが、以下一々指摘

しない）、兵部・甲斐は目附に新柝を作らせて年貢増徴を図り、しかもそれを安芸の仕業と言い触らす。困惑した百姓達が江戸へ出て安芸を訴えようと相談に及んだとき、百姓の中の一人が安芸の無実であることを主張し、皆納得する。これは兵部・甲斐が安芸を諸人に疎ませるために仕組んだ謀略であった。『仙台萩』では具体的な方策は示されなかったが、甲斐が兵部に安芸・小十郎を諸人に疎ませようと語る件がある。『伊達鑑実録』が、その具体策を拵えたのである。新柝は領主側の苛斂誅求の手立としては常套的なもの。

亀千代の寝所の下に忍び込み殺害しようとしていた荒木和助が松前鉄之助に捕えられる。ここまでは『仙台萩』と変りないが、『仙台萩』の和助が拷問にも屈せず舌を嚙んで死んだのに対し、ここでは兵部の命によって神並三左衛門が和助に毒を吞ませて殺す。その直後に三左衛門が返り忠を決意するのは、また『仙台萩』そのまま。後出の作ほど内容が過激になる、よい見本である。

安芸は家来の藤井小三郎が甲斐の間者であることを見抜く。それと前後して、安芸は家来に二十七ヶ条の訴状を江戸の老中へ届けさせる。綱宗隠居後の仙台藩士達の評議の節、兵部・甲斐の奸佞を暴き立てた勇猛な士熊田甚五兵衛（この時の言動は『仙台萩』からある）が、安芸の使者を

護衛する。甲斐は使者を殺し訴状を奪おうと刺客を差し向けるが機会がなく、刺客の中から裏切って熊田達に内通する者も現れ失敗に終る。『仙台萩』の筋に細かな尾鰭が付き、それに従って登場人物が増えた。熊田は『仙台萩』以来の登場人物であるが、彼には相応しい活躍の場が新たに設けられている。

安芸出府により酒井雅楽頭は兵部を呼び寄せ、甲斐とよく示し合せておくよう指示する。甲斐は一切兵部は知らなかったことにして、すべては自分に一任せよと兵部に言う。また他日、兵部は雅楽頭から老中板倉内膳正が気に掛かる存在であるので、取り入っておくよう内意を受ける。甲斐は手蔓を求めて内膳正に対面して賄賂を差し出し、兵部と謀った計画を具に言上する。内膳正は悉く聞き終えた後、先に受け取った音物を返し、甲斐を決め付け追い返す。甲斐と兵部の密談の中では、対決の際に繰り返し甲斐が臨むことになる、安芸との相拷問が早くも語られる。このあたりから評定の前哨戦と取れるのであるが、『仙台萩』の評定の場を一層膨らませようという意図が露わである。兵部・甲斐・酒井雅楽頭・板倉内膳正、いずれも『仙台萩』より以前『仙台家中公事物語』からの主要な登場人物だが、それぞれの人物の性格付けが濃厚になっている。兵部は愈ひ弱で甲斐の陰に隠れる。雅楽頭は当初から兵部・甲斐の

黒幕であつたが、登場の頻度が増している。甲斐と内膳正との対面、これはどう評価すべきなのか。裁判以前に裁判官が被告自身から彼らの陰謀の始終を聞いていたのでは、被告の負けは火を見るよりも明らかではないか。逆臣滅び御家は安泰という結末はよく承知していても、それは一先ず置いておいて、正義の側と共に一喜一憂しつつ読み進めるのが実録の一般的な読み方であろう。続き物の講釈を聞くのであれば、対決の場に至つた時には、前の筋を忘れてゐることもあつたであらう<sup>(1)</sup>。しかし読み物とすれば、読者の裁判の行方への興味を減退させかねないこの件、なくもがなと思えるのである。一体、この件は何故ここに置かれたのか。実は、答えは単純なことであつて、甲斐が（ひいては悪人側が）内膳正に（同じく正義派に）やり籠められる場面を、出来るだけ多く設けたかたというに尽きるのであらう。濱田啓介先生は「近世に於ける曾我物語の軍談について」（『近世小説・營為と様式に関する私見』所収。京都大学学術出版会 平成5年）の中で、講談本『評林曾我物語』についてこう述べられた。

曾我物語の全体としては、善人の受難忍苦と報復による逆転という構造であるが、何十日もの長講全体としてはそういう構造であるが、部分部分としては、もっと数多く、善玉が勝つことが積重なることが好ましい。

で、悪は小悪となり、しよつ中善玉にやり籠められる事になる。所謂半道敵である。工藤も八幡も梶原も所詮半道敵である。寄席講談の曾我物語はいわばしよつ中勝っている物語である。

兵部はともかく（酒井雅楽頭もそう評して可な場面が多い）、甲斐が「半道敵」というのはそぐわないのであるが、改めて読直してみると、兵部と合体してからの甲斐の計略で成功したのは、手始めの綱宗押込めから兵部の後見職就任までであつて、その後はすべて失敗している。ここでも甲斐は、評定の始まる前から板倉内膳正にやり籠められてゐる訳である。なお、この場で『伊達鑑実録』の内膳正は「理非を明らかにするのが我等の職分、賄賂は町人などのすることであつて武士道にはそのような行為はない」云々と説くが、『伊達鑑秘録』では省かれ代つて内膳正の由緒（その半ばは前引『武野燭談』巻之十九「板倉内膳正重矩出身の事 額の事」と重なる）が長々と語られる。甲斐の口にする「相拷問」も甲斐の人間像を語るには重要である。甲斐が安芸を説き伏せられなかつた時の最後の手段として、安芸と自分とが同時に拷問にかかり、老人である安芸が責め殺されることを目論んだものである。この目論見も大詰の寛文十一年（一六七一）三月二十二日の対決において甲斐が申し出たところ、内膳正から「自分から拷問を願うと

は珍しい、それこそ悪心のある証拠。それほど拷問された

ければ、己れ一人を拷問する」と決め付けられ、水泡に帰する。以上は『伊達鑑実録』に拠るが、『伊達厳秘録』では内膳正の台詞は長くなる。一部を引用する。「汝神武以来珍しき曲者なり凡そ侍ひたるべき者は拷問に掛らるゝは死しての上までの恥なり一度獄卒の手に渡り拷問に掛らるゝ者は貴人高位の前に出る事成難し、……此方より仮令拷問を申付るとも其儀に於ては免を請<sup>こほ</sup>んと云んこそ侍ひの志しなるべきに……（『伊達厳秘録』の引用は、昭和版帝國文庫「<sup>柳田泉</sup>伊達秋田騷動実記」に拠る）」「伊達鑑実録」の短い台詞を説明的に引き伸ばせばこのようになるのであろう。元禄元年刊の『新可笑記』巻四―五で、奉行が某浪人が殺人を犯したことを確信しつつも、「侍たるものを拷問はなりがたし」（引用は明治書院刊『対訳西鶴全集』9に拠る）と言うのも法的な根拠があつてのことではなく（同書巻一―では「れきくゝの侍」が拷問される。

佐久間長敬氏『拷問実記』△<sup>江戸</sup>犯罪・刑罰事例集』所収。柏書房 昭和57年復刻）にも武士の特例は記されない、同様の感情から発せられたものと思われる。大藩の家老職に在りながら、訴訟相手を殺す為には武士の恥である拷問すら自ら進んで望むという、不気味なまでの執念に畏怖の

念を抱くべきであらう。

安芸の江戸到着以後も兵部・甲斐は『仙台萩』には無かつた卑劣な手段で二度にわたつて安芸を妨害しようとする。始めは木戸弥兵衛の妻によるもの。若い頃安芸に仕えていた縁で出府後の身の回りの世話をしている弥兵衛の妻が、娘を甲斐に人質に取られて無理やり夫共々安芸毒殺を命じられる。毒薬を茶瓶に入れて沸したところ、湯気に当たつて天井から虫が落ちたため、安芸に毒と悟られ企みは失敗に終る。毒薬を茶瓶に入れること、或いは宝曆から明和頃成立（『日本古典文学大辞典』『見語大鵬選』の項。中村幸彦氏）の『見語大鵬選』からの転用か。因みに『見語大鵬選』では浅尾が投じた毒入りの茶に当たつて女中が死ぬ。

同じストーリーの読み物つていうのはたくさんありますね。……たとえば、『天保六花撰』なんかは最初

「上州屋」の件りだけだったかもしれないよ。ところが受けるもんだから、他の講談の場面をそのままこの中にとり込んだんじゃないかなつてところがある。ありますね。（六代目神田伯龍氏「わたしと世話講

談」『世話講談』所収。三一書房 昭和57年）

実録間で趣向は使い回しされたと考えるべきであらう。これ以前にも、作中での毒薬の使い方に両作は共通するものがある。影響の可能性はあると思う。



兵部・甲斐、『伊達殿秘録』では酒井雅楽頭の示唆も加わって、三月十六日の対決後、安芸の許へ刺客赤川権六が送り込まれる。仕損じた場合は松前鉄之助に頼まれたと騙る予定で偽筆の手紙まで用意していたが、忍び込んだ日に偶然安芸を訪れていた鉄之助によって、権六は捕えられてしまう。甲斐達の計画はまたしても、二重に失敗した訳である。この赤川権六一件、安芸がまだ仙台にいた頃に私宅に忍び入った曲者を捕えたところ片倉小十郎の家来と称した件（『仙台萩』から）の、悪く言えば二番煎じ。河竹黙阿弥の『実録先代萩（早苗鳥伊達聞書）』（明治9年上演。ほしきすだてのききがき）『伊達殿秘録』系の実録に基づいている）では重要な役となる木戸弥兵衛夫婦を含め、登場人物こそ増えたが『仙台萩』に新機軸を出そうとするようなものではない。

『仙台萩』では二月二十日と二十二日に安芸が尋問され、二月二十五日に兵部、翌二十六日に甲斐が尋問を受ける。三月十日、十六日が対決、二十七日が酒井雅楽頭邸での刃傷で一件落着であった。『伊達鑑実録』『伊達殿秘録』では審議の日程としては、以上に加えて対決がもう一日増えるだけである。即ち三月二十二日。この日内膳正は雅楽頭の為に公用を命じられ、審議の座にいない。気落している安芸に対し、雅楽頭は証拠の書類等を自分に渡せと言う。安芸が渡そうとした将にその時、用を済ませた内膳正が立

ち現れる。「障子ノアナタヨリ大音ニテ其書モノアグル事シバラク相待ツベシ（『伊達鑑実録』）」。証拠の品の湮滅を図る雅楽頭の思惑を察した内膳正が書類を預かり、赤川権六も呼び出されて審議は急転、甲斐が罪を認めるに至る。誠に劇的な場面である。この日は内膳正の為に設けられた

一日と言っても過言ではない。ところで審議の方はと言うと、実は『仙台萩』同様三月十六日の対決で甲斐は返答につまり、最早理非は誰の目にも明らかであった。二十二日の対決は、悪人達が内膳正を除いておいて安芸を陥れようとした、悪足掻きに過ぎない。内膳正登場の時点で彼等の企みは失敗に終わったのである。二十二日という日が選ばれたのは、『仙台萩』で雅楽頭が来る二十七日に自宅で今一度対決させたいという触れを、二十二日に廻したことに拠るのではなからうか。十七日から二十六日の内の一日を選ぶ時、僅かでも『仙台萩』に関わりのある日にすることは有りそうに思う。

二十二日の夜雅楽頭と甲斐が密談し、二十七日に雅楽頭邸にて対決を行い、その席で甲斐が安芸を切り殺すという相談がなされる。雅楽頭と兵部・甲斐が謀議して事を行うのは『仙台萩』には無かったことであるが、そのように展開する種は蒔かれていた。雅楽頭が評定を通して終始甲斐鼻根であることは勿論であるが、「三月十七日の夜に兵部

が女乗物で雅楽頭邸へ行き密談に及んだ、これには『伝』  
が有るが書き記すのは憚られる」という一節が『仙台萩』  
に見えるのである。この「伝」を講釈師が作り、後続作が  
書き加えたのであろう。その中で密談の回数も増えていっ  
たことは想像に難くない。

三月二十七日、この日の朝は安芸の身に凶徴が重なった。  
『伊達鑑実録』『伊達厳秘録』に共通する増補箇所はほ  
ぼ以上の如くである。大雑把に言って評定とその前後に集  
中している。新しい人物が増え、従来からの登場人物も性  
格付けが益々鮮明になる。しかし、『仙台萩』から外れて  
ゆく方向への成長は見られず、むしろ『仙台萩』に僅かに  
書かれていた事を膨らませてゆく傾向が顕著である。

#### 四、『伊達厳秘録』の脚色

『伊達厳秘録』については他の書名の写本を実見してい  
ない。「近世実録全書」「帝國文庫」「有朋堂文庫」いづれ  
も『伊達厳秘録』の書名で収まるが、この書名のものも栄  
泉社の「今古実録」本（第4号上中下）『伊達厳秘録』の  
刊年明治15年より遡ることを得ない。なお「今古実録」本  
『伊達厳秘録』の序詞（出版人敬白）には「<sup>げん</sup>頭」とルビを  
ふる。

成立についても『伊達鑑実録』より遅れると思われるも

の、それ以上に特定する史料を持たない。西沢一鳳軒が  
『伝奇作書』残編中の巻と『脚色余録』初編下の巻に、弘  
化元年（一八四四）九月大坂中の芝居の『伊達姿萩燕都  
棲』で塩沢丹三郎の場を脚色したことを記し、その正本を  
写している（『脚色余録』）。「江戸には此写本もあり講釈に  
ても専ら読事也（『伝奇作書』）」と言う、その写本は塩沢の  
件を見る限り『伊達厳秘録』である。弘化元年が一応成立  
の下限ということになる。

『伊達厳秘録』独自の増補を見る。

『伊達鑑実録』同様『諸家深秘録』『諸家大秘録』を利  
用しているが、『伊達鑑実録』とは異なる箇所を選んでい  
る。『伊達厳秘録』の叙述の順にまとめて記すと、冒頭の  
「伊達家系図政宗由緒の事」には『伊達鑑実録』が省略し  
た（本稿第二章参照）梵天丸が行者満海の生れ変わりとの説  
を載せる。『諸家大秘録』巻之七「水戸黄門光国卿御出生  
之事」伊達正宗出生奇妙之事」に拠っている。「仙台の諸  
士江戸へ到着の事」綱宗隠居の事」の中では「扨幼君亀千  
代が母と云は諸家深秘録に曰松平周防守の浪人に三沢何某  
と云者あり（下略）」と書名も記される。巻之三「松平陸  
奥守殿母儀之事」がその出典である。安芸の江戸出府直前  
に置かれた「伊藤七十郎勇力の事」横死怨念の事」は『諸  
家深秘録』巻之十六「仙台出ノ浪人伊藤七十郎勇力怨念之

事」のほぼ丸取り（『玉滴隠見』巻第五「伊藤七十郎勇力強死ノ事」△内閣文庫所蔵史籍叢刊」44）も殆ど同文。

『玉滴隠見』↓『諸家深秘録』↓『伊達厳秘録』という流れであろう。「片倉家来由のこと」（この条のみ他と離れて刃傷沙汰の後、片倉小十郎活躍の件の前に置かれる）の典拠もやはり『諸家深秘録』の巻之七「伊達政宗卿寵臣片倉小十郎事」である。

概ね主要な登場人物の「伝」を加えたものであるが、『伊藤七十郎勇力の事』<sup>并</sup>横死怨念の事」は該当しない。七十郎は『武將感状記』（享保元年刊）にその逸話が収まるので、それなりに知られた人物であったのかもしれないが、『伊達厳秘録』の中ではこの条にしか登場しないのである。内容は、力量人に優れた伊藤七十郎という仙台の浪人が兵部のために理不尽に牢に入れられ、挙句縛り首に処せられる。彼の首は最後の言葉通り胴体の後ろに落ちる。七十郎憤死の翌年御家騒動が起こり、それから三年目に兵部は御預けとなった、すべては七十郎の怨念のなせることであるというもの。『諸家深秘録』に伊達騒動の被害者の伝を見出し、作中の登場人物として活躍させることもなく、単にそのまま抜き出した安易な手法であろう。非業の死を遂げた者の怨念が騒動の原因という解釈も、伊達騒動物の中では『伊達厳秘録』が最初であっても、内容的に目新しいも

のではない。むしろ、怨霊や祟りといった人智の及ばない物の語られることなく、あくまで人の世界の中ですべてが解決することに『仙台萩』の特色を見たいと思う。『仙台萩』で兵部・甲斐を追いつめたのは、安芸と内膳正であつて、誰かの怨念などは影も形もなかった。

『伊達厳秘録』は評定以外の部分は同じ内容であつても短縮している。上記以外で増補されたことと言えば、膳番塩沢丹次郎（兵部・甲斐の一味として『仙台萩』からの登場人物）の忠死くらいしかなく、しかも内容は『伊達鑑実録』の多田武助の件と殆ど変らない。武助の行為を丹次郎のそれにし、それでも武助の名前だけは残している。何の活躍もしない人物を新たに創出するのは不自然であるので、『伊達厳秘録』が『伊達鑑実録』を参照しつつ、それより後に作られた一証拠であろう。

評定の場合は活躍的に長大化する。全編の中で評定から刃傷までの占める割合は『伊達鑑実録』が四分の一強（『仙台萩』もほぼ同様）であるのに対し、『伊達厳秘録』は半分弱となる。この部分の描写や会話は著しく増加し、文飾も増える。但し、安芸の二月二十日・二十二日の尋問、兵部の二十五日の召喚が二度づつ繰り返して叙されているので増えた印象を受けるが、評定の日程自体は『伊達鑑実録』と変わらない。黒幕酒井雅楽頭の登場回数は一層増え、

尋問・対決の行われる度に兵部が雅楽頭邸へ呼ばれ指示を仰ぐようになる。全く新たな内容の増補としては、安芸に味方が増える。即ち、奉行職の柴田外記と留守居役蜂屋六左衛門は申し合わせて、兵部・甲斐逆心の証拠となる書類を集めていたと安芸に語り、奉行職の奥山大学は眼病と偽って兵部・甲斐の様子を伺い、以前から安芸に内通していた。これらに関しては、再び濱田先生の「近世に於ける曾我物語の軍談について」を引用する。

『<sup>評家</sup>曾我物語』において一方、曾我兄弟を支援する人々はどうか。それは実に数多いのである。兄弟由比ヶ浜の件では、鎌倉中の大名が助命に動いたのであるから、大名全部といってもよろしいのである。

善玉に味方の増えるのは、講釈に共通する傾向なのである。

この他に評定の件で増えるのは、先ず甲斐の家来片山隼人がかつて安芸の家来里見郡右衛門を返り討ちにしたことに對し安芸は意趣を含んでおり、その意趣を晴らすため訴訟に及んだと甲斐が主張すること、次に刃傷事件後に雅楽頭が今回の不祥事につき伊達家を厳しく吟味すると発言すると、内膳正が三月二十二日の対決で罪は確定したにも関わらず、またもや裁判を行った自分達にも責任があると抗弁し、伊達家は事無きを得たこと、加えて前掲中村論文に

言う甲斐弁護論である。

『伊達嚴秘録』は『伊達鑑実録』のように『仙台秋』における軍書風の脚色、武士の生き方を示す弁舌などを省略はしていない。しかし、全体として評定場面が膨張した分、そのような箇所比重は小さくなっている。

共通部分が多いのだから当然とも言えるが、『伊達鑑実録』と『伊達嚴秘録』の性格に余り違いはない。両作の特徴をまとめておく。『仙台秋』が『仙台家中公事物語』を使い切ったように、『仙台秋』の隅々までを利用し、その目指していた方向に話を膨らませている——評定の場を長くすることは、『仙台秋』が『仙台家中公事物語』から成長する際の基本方針であった。主要登場人物の性格も『仙台秋』のそれを受け継ぎつつ、より鮮明に色付けされている——。『諸家深秘録』『諸家大秘録』を多く用いて増補する。が、主筋には余り関わらない。むしろ主筋にからむのは典拠を持たない、作者が嘘と知りつつ読者を面白がらせるために創作した「娯楽的付加」（中村幸彦氏「神道系講談——吉田天山の『北野実伝記』を軸として——」『著述集』第10巻所収）である。この付加によって娯楽色豊かなものとなった一面、『仙台秋』の所々に見られた談理性は後退した。『伊達鑑実録』と『伊達嚴秘録』に関して私の知るところは以上である。

## 五、終りに、『伊達嚴秘録』以後

以下には、『伊達嚴秘録』よりさらに後の変化について僅かではあるが挙げておく。

先ず『伊達鑑実録』と『伊達嚴秘録』を合わせた作が出来る。管見に入つたものは早稲田大学図書館蔵『伊達騒動実録』、これは、『伊達嚴秘録』を基本としつつ多田武助の件を含む。また、山本卓氏蔵『伊達秘記』は講釈をそのまま写したような作であり、後半の評定から刃傷までは『伊達嚴秘録』を若干増補したものであるが、前半では白川主殿の諫死が読まれている。この種の合体作は、まだ多く残るであろう。

実録界の人気者水戸光圀が登場する。神並三左衛門が返り忠をして安芸邸へ駆け込む件で、追手を憚り迂回路の水戸街道を通つたところ、途中で光圀に遭遇する。前引黙阿弥の『実録先代萩』（三幕目）に出るところ。切附本『伊達評定奥之碑』（刊年不明。伊勢屋大西庄之助板）にも同場面があるが、どうやら歌舞伎の方が先行するようである。色々な実録に顔を出す光圀のことなので、『伊達嚴秘録』系の写本で彼の登場する物も作られたのであろう。

評定の場合が長大に成つた結果、他の部分は切り捨てられることがある。前引山本氏蔵『伊達秘記』と、（注4）の

『伊達黒白大評定』は、共に刃傷までで御家安泰となつて終る。仙台での片倉小十郎の活躍は記されない。切附本『伊達姿黒白鑑』（内題。外題は「伊達評定鑑」、東北大学附属図書館蔵狩野文庫本。（注4）所引の高木氏「切附本書目年表稿」では安政四年刊の部に入る）は、『伊達嚴秘録』のダイジェストであるが伊達安芸（東山の世界に仕組んでいるため、渡辺民部）の出訴から刃傷までである。

評定が余り知られてしまうと、今度は殊更それ以外のところに新味を出そうとする。架蔵の講談速記本『伊達騒動』（錦城齋貞玉口演。春江堂書店 明治39年印刷、大正3年65版）は、『伊達嚴秘録』系と言えるが、全十三席の内第七席から第十席までを松前鉄之助の武勇伝が占めている。そして神並三左衛門の返り忠から出訴、評定、対決、刃傷までを第十三席だけで読み切ってしまう。「此れ等（刃傷のこと）は伊達騒動に於て悉く出て居りますから爰は唯大略を申上ますので御座います」とは急いだことに對しての断りの弁である。読者（聴衆）は普通の伊達騒動などは先刻御承知であろうという訳である。

講談速記本を博搜すれば新たな発見もあるであろうが、今後の課題に残して本稿を終えることとする。

(注)

(1) 延広真治氏「怪談 牡丹燈籠」(『全生庵蔵・三遊亭円朝コレクション 幽霊名画集』所収。ペリかん社 平成7年)に、円朝の『牡丹燈籠』に関して「(速記本との対比)そもそも、新三郎殺しの下手人を伴蔵と知って、もう一度読み直すのは、速記本で一氣に読み得るようになってからの事態である。十五日間寄席で聴く場合、二つの筋が「入り混じる」(延広氏の訂正)上に、二日目冒頭に、「嘶跡に帰りて」とあるように、二つの筋の時間の流れが異なっているため、ますます混乱を起こし、記憶も薄れる上に、円朝が名人とあつては、先ず氣付かないであらう」との発言がある。

(2) 『伊達競阿国戯場』(烏亭焉馬他作。安永八年へ一七七九)初演の『仙台萩』利用については「近松半二 江戸作者 浄瑠璃集」(『新日本古典文学大系』94)の脚注が詳細であるが、第十で細川勝元(実録の板倉内膳正に当たる)が大内の用向を早く済ませ評議の場へ遅れて登場すること、山名宗全(酒井雅業頭に当たる)が証拠の一札を取り上げること、仁木弾正(原田甲斐に相当)を宗全が拷問にかけると言うことなど、『仙台萩』(『全書仙台萩』)にはない二十二日の対決をも踏まえている。安永八年以前に、『伊達鑑実録』のこの件の増補は行われていたことになる。

(3) 小田田誠二氏「大岡仁政録」の謎 又は『近世実録全書』種本考」(『近世部会会報』9 昭和63年)に拠れば「近世実録全書」の種本の多くが「今古実録」であるらしい。但し、『伊達頭秘録』の場合、冒頭の数行が両者で異なり、「近世実録全書」本は「片倉家来由の事」を欠く。それ以外は極めて近い。

(4) 切附本『伊達黑白大評定』(外題に拠る。内題は「伊達厳秘

録」。高木元氏「切附本書目年表稿」(『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷——』所収。ペリかん社 平成7年)では刊年不明の部に入る。架蔵本には文久二年(一八六二)に求めたとの書き入れがある)は、『伊達厳秘録』のダイジェストであるが、評定から刃傷までは他に比して省略が少なく、ためにこの部分で全体の三分の二ほどを占める。刃傷以降の仙台での騒動は全く切り捨てられている。

(附記) 前稿に引き続き本稿においても、山本卓氏の豊富な御蔵書からは多大な恩恵を蒙りました。